

# 文化を媒介とした新たな教育の可能性

## —パリ郊外の街パンタンにおける学校のための課外活動から—

高橋 菜穂子

### 1. はじめに

近年、学校における学びの危機が叫ばれる中、それに対応する形で、学校教育の枠に収まらないさまざまな活動が試みられ、学びそのものの、質的な転換が求められている。

教育の達成は、子ども達が、学校での学習をいかに効率よく習得し、周りの子どもの成績に遅れないようにするか、あるいは、周りの子どもに差をつけて先を走るか、ということにおいてのみ問われるものではない。教師がいかに子ども自身の意欲を引き出すか、成績評価以外の軸で子どもの自尊心をいかに育むことができるかなど、数値で測ることのできない、子ども自身の実感に即した枠組みにおいてこそ問われていると言えよう。

しかし、特に2000年代以降、子どもの貧困、ひとり親家庭の増加、家族機能の弱体化といった社会問題が顕在化しており、親の社会的、経済的状況によって、子どもの教育環境に大きな不均衡が生じている。このことは、学習への動機づけ以前の段階で、一部の子ども達を学ぶことから遠ざけてしまうさまざまな障壁があることを示している<sup>1)</sup>。

ところで、フランスでは、一貫して文化を教育に取り入れた先駆的な試みがなされている。映画「ちいさな哲学者たち」(ジャン＝ピエール・ポッジ、ピエール・バルシェ監督、2010)は、パリ郊外の幼稚園で実際に行われている哲学の授業を紹介したドキュメンタリーであるが、教師による、「愛」や「死」についての形而上的な問いかけに対して、子ども達が語り合い、答えを探していく中で、学びが生みだされていく様相を捉えている。また、フランソワ・ベゴドーが自身の教師経験を綴った「教室へ(2006)」<sup>2)</sup>は、学級崩壊が起こったあるパリの中学校のクラスにおいて、作文の授業を通じて、生徒が自己表現の術を獲得し、教室が再生していく過程を描いている。

興味深いのは、このような教育が、歴史的に移民が多く、貧しい、さまざまな課題を抱えた地域を舞台として行われたという点である<sup>3)</sup>。経済的な豊かさをもたない地域において、ただの教科教育の補習ではない、先駆的な教育的試みが行われていることは注目値する。

さらにフランスでは、文化政策の主体が、国から地方へとシフトするという流れのもとに、地方自治体がそれぞれ独自の地域の特徴を生かした教育実践を試みている。

もちろん、こういった実践は、フランスという国の社会的・歴史的な諸条件のもとで成り立つものであり、すぐに日本と比較したり、援用したりできるものではないが、教育の多様なアプローチをとらえることは、上述のような問題と向き合う上でも有益であると思われる。

## 2. 文化を媒介とした先駆的取り組みを行うパンタン

本稿では、パリ郊外のパンタンという街で、行政と教育現場が協働して行っている課外活動を紹介する。後に詳述するが、パンタンもまた、移民が多く、経済的貧しさを抱え、教育格差が広がる街である。そこで行われたユニークな試みを紹介することで、教育への多様なアプローチの可能性を浮き彫りにしたいと考える。

パンタンは、パリの北東部に位置するセヌ＝サン＝ドニ県のコミューンである。パンタン市役所のホームページ<sup>4)</sup>によると、街の面積は約5平方キロメートル、人口は54,124人、パリに隣接しており、パリ中心部からメトロで約20分、高速鉄道の主要な線路が何本も通るアクセスの良さからも、パリ市内やシャルル・ド・ゴール空港からの人の流れも多い。



図1 フランス全図



図2 パリおよび近郊拡大図

もともとは、19世紀から20世紀にかけて工業地帯として発展し、パリ近郊の他の郊外都市と同様に、旧植民地、特にアフリカからの多くの移民を受け入れた。しかし、1970年代のフランスの不況で工場の多くは潰れ、その後は失業者が街に溢れることとなった。

現在では、その立地のよさから、エルメスやシャネルといった大企業の工場がこの地を拠点としており、街は再び活気を取り戻している。日中は働く人々にぎわっており、安さを求めて郊外に滞在する観光客のためのホテルも立ち並んでいる。街を歩けば、パリとは異なる近代的な建物が立ち並ぶ中に、世界中のさまざまなルーツをもつ人々の姿を目にすることができる。



図3 パンタンの街中の様子

パンタンは、文化水準の向上のため、独自の政策を行っている。例えば、2004年には、国立ダンスセンター（Centre national de la danse）がパリ中心部からパンタンに移設され、地域の活性化や治安の向上に一役買っている（牧瀬，2007）。2015年には、ポルト・ド・パンタン駅を最寄り駅としてコンサートホール、フィルハーモニー・ド・パリ（Cité de la musique - Philharmonie de Paris）が建設されたこともあり、恵まれた文化的環境を擁し、人形劇やジャズの国際的なフェスティバルも開催されている。これらの取り組みによって、市民の文化的な交流や、社会的な連帯、精神面での解放を目指している。



図4 街を流れる運河。右手前にあるのは市営劇場 Théâtre du fil d'eau

また、文化は教育への有効なアプローチとしても重視されており、市役所のホームページによると、市民のために、ダンス、音楽、演劇、視覚芸術の分野それぞれのクラスが用意されている。パンタンの3つの図書館では、子どもと大人と一緒に参加できるワークショップやイベントが開催さ

れており、映画館では、「小学生のための映画」、「高校生のための映画」といったように、年齢によって楽しめる多数の企画が用意されている。これら文化事業への力の入れ方からも、課外の文化教育と、学校における教科教育をダイナミックに循環させて、街全体で子どもを育てていこうという姿勢がうかがえる。

### 3. 学校のための課外活動 (Action éducative à l'école)

本稿では、上記のような独自の文化政策を行うパンタンにおいて行われている「学校のための課外活動 (Action éducative à l'école)」というプロジェクトを取り上げ、いかにして、文化という仕掛けの中で、行政と教育現場が協働しながら独自の活動を行っているのかを紹介する。特に、このプロジェクトを支える、フランス独自のコミュニティ形態であるアソシアションにも着目しながら、その独自の取り組みを明らかにしたい。

本稿が手がかりとするのは、パンタン市のホームページと、教師のために配布されている学校のための課外活動の手引き (consulter le nouveau guide directement en ligne)、そして、プロジェクトを牽引する市役所職員へのインタビューのデータである。

パンタンでは、8年前に市役所と国民教育省が主体となり“Action éducative à l'école”についての協定を結び、プロジェクトをスタートさせた。これは、直訳すると「学校のための教育的活動」となるが、主に放課後や休日の時間を利用して、子ども達がさまざまな分野のアーティストや専門家と交流し、プロの技を体験する活動を指している。そのほとんどが参加費無料で行われ、対象は、主に小学生、一部、幼稚園児や特別支援学校の子どものためのプログラムもある。このプロジェクトは、単に子どもが学外で市のプログラムに参加するという性質のものではなく、市と学校現場とアーティストが協働しながら子どもの変化を促していくものである。プログラムには、子ども達が教師や親の前で学んだ成果を発表する機会や、教師がディスカッションに参加する機会も設けられており、学校全体を巻き込んだ試みである。本稿では、そのような意味をこめて、「学校のための課外活動」という訳をあてる。

パンタン市役所のホームページには、以下のような記述がある。

「パンタンと国民教育省は、幼稚園や小学校の園児・児童が多岐にわたる教育的活動を受けられるよう、この活動を練り上げてきた。好奇心を呼び起こし、感度を目覚めさせ、知性を高め、知識を増やすことを目指している。」

これらの活動は、さまざまな分野においてワークショップの形で行われ、子ども達が五感を使って体験的に学ぶことが目指されている。さまざまな分野とは、以下のようなものである。「見る芸術 (Arts Visuel)」、「スペクタクル (Arts du Spectacle)」、「音楽 (musique)」、「映画・映像 (Cinéma et Audiovisuel)」、「街の遺産・歴史 (Patrimoine et Histoire de la Ville)」、「青年文学 (Littérature Jeunesse)」、「科学・環境・持続可能な開発 (Sciences, Environnement et Développement

Durable]、「健康 (Santé)」、「スポーツ・探検教室 (Sports et classes de Découverte)」。

それぞれの分野に3～23個の多彩なプログラムが用意されている(表1)。

表1 「学校のための課外活動」のプログラム一覧

見る芸術 (Arts Visuel)		
タイトル	開催場所	対象学年 <sup>5)</sup>
展示用メディア	県立音楽学校 <sup>6)</sup>	幼・小1～2・特・語
現場体験	県立音楽学校	全て
物語と景観：移りゆく街の映像	県立音楽学校	小・特・語
サン・キャトルのアーティストと過ごす1	学校/サン・キャトル <sup>7)</sup>	小
サン・キャトルのアーティストと過ごす2	学校/サン・キャトル	小3～5・特
スペクタクル (Arts du Spectacle)		
演劇を読む	県立演劇学校 <sup>8)</sup>	小4～5
舞台上で遊ぶ	県立演劇学校	幼(長)
動きで覚える：読書から	県立演劇学校	小3
古典	県立演劇学校	幼(中)
鑑賞教室：サーカス(幼稚園)	ラ・ヴィレット公園 <sup>9)</sup>	幼(長)
鑑賞教室：サーカス(小学校)	ラ・ヴィレット公園	小
鑑賞教室：小さな創作	ラ・ヴィレット公園	小1～3
鑑賞教室：スペクタクル(幼稚園)	ラ・ヴィレット公園	幼
鑑賞教室：現代演劇(小学校)	ラ・ヴィレット公園	小3～5
景観とスペクタクル	ラ・ヴィレット公園	小3～5
舞台ができるまで	人形劇学校 <sup>10)</sup>	小3～4
音楽 (Musique)		
西アフリカの歌とリズム	ライブハウス Dynamo <sup>11)</sup>	小4～5
世界のコーラス・リズム	ライブハウス Dynamo	小2～3
詩と音楽	ライブハウス Dynamo	小1～2
ギターと音楽	ライブハウス Menuiserie <sup>12)</sup>	小3～5・特
アラブ世界の音楽の探検へ	フィルハーモニー・ド・パリ <sup>13)</sup>	小4～5
音楽で物語る：千夜一夜	フィルハーモニー・ド・パリ	小4～5
フィルハーモニーと音楽の目覚め1	フィルハーモニー・ド・パリ	幼(長)・小1～2
フィルハーモニーと音楽の目覚め2	フィルハーモニー・ド・パリ	幼(中～長)・小1
楽器を使おう	音楽工房 Lutherie Urbaine <sup>14)</sup>	小・特
古典とヒップホップ	Pulcinella 楽団 <sup>15)</sup>	小1～2・特
映画・映像 (Cinéma et Audiovisuel)		
学校と映画	映画館104	幼(長)・小・特・語
中庭で祭典	映画館104	幼(長)・小・特・語
短編映画の文体と実現1	パンタン図書館	小3～5
短編映画の文体と実現2	パンタン図書館	小3～5
街の遺産・歴史 (Patrimoine et Histoire de la Ville)		
わたしの町のアートを発見する	記憶・遺産センター <sup>16)</sup>	小3～5
運河：仕事から遊びまで	記憶・遺産センター	小3～5
第二次世界大戦中のパンタン	記憶・遺産センター	小5
地図と模型	記憶・遺産センター	小2～3
「パンタン」で下車	記憶・遺産センター	小2～3

古典期のダムール家	記憶・遺産センター	小5
青年文学 (Littérature Jeunesse)		
君の本を貸してください	パンタン図書館	小
情報に基づいて	パンタン図書館	小4～5
アートの本の発見	パンタン図書館	幼・特
学年末の本	パンタン図書館	小1
漫画：タンタンからナルトまで	パンタン図書館	小3～4
俳句の季節	パンタン図書館	小3～4
科学・環境・持続可能な開発 (Sciences, Environnement et Développement Durable)		
天文学：星々の中の地球	パンタン図書館	小3～5
バビロニア風に計算しよう	パンタン図書館	小4～5
物質とエネルギー	Petits Débrouillards <sup>17)</sup>	幼(長)・小1～2
町の中心の生物多様性	Petits Débrouillards	小1～2
セヌ＝サン＝ドニの考古学	Petits Débrouillards	小5
広がる僕らの町	Petits Débrouillards	小3～5
大気、これは事件だ！	パンタン市役所	小3～5
水の現状	パンタン市役所	小3～5
水、源から蛇口まで	パンタン市役所	小2～3
第二の人生をごみ箱のために！	パンタン市役所	小3～5
ごみ、君は誰？どこに行くの？	パンタン市役所	小1～2
僕らの星で暑さを断ち切る	パンタン市役所	小3～5
持続可能な開発、一步一步	パンタン市役所	小4～5
でもこの音はどこからくるの？	パンタン市役所	小3～5・特・語
危機の動物のSOS	パンタン市役所	小3～5・特・語
世界の動物はっけん	パンタン市役所	小1～2
生物多様性、これなに？	パンタン市役所	小4～5
ミツバチの世界	パンタン市役所	小・特
ちょっと探検	パンタン市役所	小4～5・特
赤ちゃんを見てみよう	パンタン市役所	小3～4
植物を知る	パンタン市役所	小3～5・特
自然を感覚する	鳥類学研究所 <sup>18)</sup>	幼(小～中)
生物多様性への旅	鳥類学研究所	小3～5
健康 (Santé)		
健康を保とう！	パンタン市役所	全
校内での健康のための教育事業	パンタン市役所	全
歯科検診(虫歯と矯正)	パンタン市役所	幼(中)・小2、4・特・語
スポーツ・探検教室 (Sports et classes de Découverte)		
走る	パンタン市役所	小2～5・特・語
泳ぐ	パンタン市役所	小2～5・特・語
体操	パンタン市役所	小・特・語
探検教室	パンタン市役所	幼(長)・小・特・語

ずらりと並んだ項目を見れば、その活動が多彩であることがわかる。文化活動においては、フィルハーモニーオーケストラやコンテンポラリー演劇など、いかにもパリを彷彿されるものから、アラブやアフリカ音楽、あるいは漫画など、フランス国外からやってきた文化も幅広く取り入れられている。自然科学においても、街、環境問題、ゴミ問題など、身近で馴染みやすいテーマが用意さ

れている。

注目すべきは、以上のプログラムが、パンタンという土地に根ざしていることである。例えば、「第二次世界大戦中のパンタン」や、「セヌ＝サン＝ドニの考古学」などは、子ども達が普段暮らしているパンタンについて、深く掘り下げるものである。また、活動のほとんどが、図書館、市役所、ライブハウスなど、パンタン内にある施設を利用するものとなっている。普段の学校での学びとは全く異なる場所で行われるが、その一方で、その場所は必ずしも子ども達の生活からかけ離れてはいない。この課外活動で取り組んだことが、学校における学びにとどまるのではなく、学校の外でも、パンタン市民として生きるということを支えるに違いない。

#### 4. 職員へのインタビュー

以下では、「学校のための課外活動」を牽引し、企画・コーディネートを行っているパンタンの職員、ソランジュ・アルネット氏へのインタビューの抜粋をもとに、プロジェクトの詳細についてさらに明らかにしていく。

筆者は、2015年8月にフランスに滞在した際、知人を介して、パンタン市役所の職員であるアルネット氏を紹介してもらい、市役所を訪れインタビューをする機会に恵まれた。インタビューには、筆者の他に、アルネット氏を紹介してくれた知人が同席し、適宜、知人の通訳を介しながら基本的には英語でインタビューを行った。インタビューは合計で約1時間であった。冒頭で、録音の許可をとり、ICレコーダーで録音し、インタビュー終了後、文字に起こしたものを日本語に訳した。

##### (1) パンタンという街の独自性

さて、パンタンという街の成り立ちについては上述した通りであるが、アルネット氏はインタビューの冒頭、課外活動の詳細に先立って、この街の状況から説明し始めた。パンタンは「パリと近接しているけれども、決してパリではない」。これは、家賃が高騰するパリに比べて、比較的安い住居を求めて低所得世帯が多く暮らしていること<sup>19)</sup>や、歴史的に移民が多く、さまざまなルーツをもつ住民がひしめき合っていること、そのため、言語の壁もあり、子ども達の基礎学力に格差が生じていることといったパンタンをとりまく状況を指している。

かつて、パリ近郊の多くの街と同様に、パンタンには多くの工場が建設され、多くの労働力を必要としました。しかし、それは終わりました。旧植民地からは多くの人々が移り住んでいますが、もはや職はありません。我々の街には、世界中から多くの人々、多くの家族が集まり、事実、その多くは非常に貧しい人々です。あなたは、世界中から集まった人々に出会うことができ、全てのルーツに出会うことができます。私は、政策や文化を考える時、そのような背景は根本的に重要であると考え、そのことをお話しています。このように、私たちには独自の状況があります。世界中から集まった人々、彼らはフランス語を話すことすらできず、貧しい状況に置かれています。

アルネット氏が「状況 (situation)」という語を用いるとき、力強い響きがかもっている。彼女はパンタンに赴任する以前、パリの中規模程度のアート施設に勤務していた。そこでは、世界からやってくるアーティストたちと一緒にあって、さまざまな催しを企画したり運営をしていたとのことである。パンタンでの仕事もまた文化活動の一環であるが、パリとは違う。その違いを生み出すのはパンタンが置かれている状況であり、またその違いによって、「文化」の意味合いも異なってくる。

文化は、コミュニティを形成するために重要な役割を果たします。これが、私がパンタンで働く理由です。我々は、すべての人のために、とりわけ、貧しく、他の地域からフランスへ移ってきた若者のために働いています。これが目的ですが、とても複雑です。想像してもらえますが、もしパリの中心地で働いていたら、みんな多少なりとも稼いでいます。でもここでは違います。我々には責任があるのです。それゆえに、私たちは教育現場や社会福祉、アソシアシオンと一緒に働いているのです。ここには世界中の国から来た人々がいますし、その多くは裕福ではありません。そういう人たちと一緒に社会を作り、穏やかに健康に暮らそうとするならば、我々は何かをしなければなりません。それが文化的な取り組みであり、教育や社会福祉との協働です。それには責任があります。

アルネット氏が「責任」という言葉を多用しているところから、パンタンという街が負っている状況の切実さをうかがい知ることができる。「世界中の国から来た人々」がいて、「その多くは裕福でない」のであれば、その社会を維持するということがどれだけ困難か、想像するに余りある。就労、税金、社会保障、医療サービス、子どもの教育など、行政が関わる範疇を見ても、行政の手の行き届かないところがあることは想像に難くない。その上、もしその人がフランス語に十分通じていない場合、さまざまな行政サービスを前にして、書類を準備してもらうことはおろか口頭で説明することも難しいであろう。市民を支え守るための行政サービスが、障害となって立ちほだかる。こうした状況にあって、「一緒に社会を作る」という言葉は、強い決意がなければ、軽々しく口に出せるものではない。そして、そのような決意をもって困難と向き合う際に、最も重視されるのが、文化を軸にした若者への働きかけなのである。

私たちは、ある試みのための機会を作ろうとしています。それは、若者や子どもに向けた試みであることが重要な点です。なぜならそれは主要で、世界的な問題だからです。そして、私たちの領域、私たちの街、より視野を広げるとサン＝ドニ県ということになりますが、ここはとても若い場所です。それはつまり、街に若者が多いということです。そこには世界中から家族が移り住んでいます。そして家族には子どもが生まれます。(中略) 若者や子どもについては、もちろんフランス国家全体が主要な論点としています。しかし、私たちの街のこの部署では、状況はさらに明確です。したがって、私たちの焦点は、若い人たちです。

パンタンが属するセヌ＝サン＝ドニ県は、パリ郊外の中では低所得者が暮らす地域として知られており、「郊外」が高級住宅地の響きを伴うパリ西部の「オー＝ド＝セヌ県」や、豊かな緑に囲まれている「ヴァル＝ド＝マルヌ県」とは違う。若者と警官との間で起きたトラブルを発端とし



て暴動が起き、フランス全土に低所得者層の暴動（及び排斥運動）が広がりかけた2005年の事件も、当のセヌ＝サン＝ドニ県が舞台である。また、2015年11月のパリ同時多発テロで、容疑者がアパートに立てこもり、警察との銃撃戦があったのも、サン＝ドニであったことは記憶に新しい。

こうした状況にあるパンタンにおいて、アルネット氏らが力を入れるのが「文化」であることは注目に値する。それは子ども達の学校での学びを促すという目標を持っていると同時に、社会の統合をも視野に入れているのである。経済的・政治的問題を一旦脇に置き、干渉を受けない独自の領域を生み出す試みであるともいえる。

アルネット氏は、このようなプロジェクトを推進することは、「個人的な選択」ではなく、「行政的な選択」であることも強調して指摘する。彼らのプロジェクトは、パンタンの政策の一環として行われており、そういった面では、個人的な見解や評価を超えて、パンタンの市政、そしてフランス国家による文化政策や、教育政策の流れの中で、強固な骨組みをもって実施されていると考えられる。インタビューの他の箇所でも、教育現場とのパートナーシップを築く際に、このプロジェクトが、国民教育省によって承認された活動であることを明言することが重要であると語られている。これは、本プロジェクトが、明確に権威付けられたものであることを示す。それによって、プロジェクトを通して大なり小なり問われうるさまざまな責任の所在が安易に現場に押し付けられることはなく、子ども達やアーティストのより自由な動きが保障されている。トップダウン的な権威付けは、ここでは必ずしもネガティブに捉えられているわけではなく、むしろ、彼女たちがこのプロジェクトによって、子ども達や教育現場を導いていこうとする際の、大きな推進力となっている。

## （2）学校のための課外活動が目指す3つのもの

以下では、実際に行われているプログラムの中身に踏み込んでいきたい。市の補助によって、アーティストが学校と関わり、何らかの文化的な活動に従事する。その取り組み自体、今日では必ずしも目新しいものではないが、アーティストと学校ないし子ども達との関わり方は特筆すべきユニークなものである。

それぞれの活動には、大きく3つのポイントがあります。それは、私たちが、実際に見て、練習して、理解するという3点です。例えば、人形劇を例にすると、7週間か8週間をかけて子ども達はそのプログラムに参加します。そしてその期間、子ども達はアーティストとともに過ごします。そして、自分自身で練習します。もちろん、子ども達はその期間、舞台を見るわけです。そして、3点目がとても重要なのですが、それらの期間を通して、子ども達は何が行われているのかを理解することができます。もちろん、このような目的は、アーティストや教師との協働にかかっています。ですから、私は教師たちに、歴史的な背景を話し、プロジェクトの趣旨を理解してもらいます。いつも、舞台上や美術館やその他の場所で、発見があるのです。

子ども達が、自分たちの活動について理解すること。教師とアーティストと行政とがよく話すこと。ここでアルネット氏が強調している「3点目」とは、何を意味しているのであろうか。

例えば、西アフリカ音楽についてのプログラムを見てみよう。この活動は、バンタン内にあるライブハウスを拠点とし、主に太鼓を使い本格的な音楽の演奏に取り組むものである（表2）。

表2 西アフリカの歌とリズムの詳細

西アフリカの歌とリズム (Mankan! Chants et rythmes mandinques)	
場所	Dynamo de Banlieues Bleues
対象	小4～5
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童に、音楽の取り組みに参加してもらう</li> <li>・個人で表現し、他人の演奏を聞き、役割を見つけてグループで演奏する</li> <li>・西アフリカの芸術的表現を通して、音楽と文化についての好奇心を得る</li> </ul>
概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・西アフリカ伝統音楽のパーカッショニストであり、ジャズなどの分野でも活躍しているミュージシャンに指導を得る。</li> <li>・音楽に触れるに先立って、児童たちには、西アフリカ（マンディカ族）音楽についての感性を磨いてもらい、歴史を理解し、合奏における太鼓（djembé）の役割を知ってもらう。音楽コードと用語を紹介し終われば、さっそく合奏に入っていく。</li> <li>・合奏は、さまざまな太鼓とパーカッションから構成される（djembés、dum-dum、cloches、shakers、claves）。</li> <li>・マンディカ族の音楽的遺産に触れる。</li> <li>・最終セッションは、学校や家族の参加を得て、Dynamo de Banlieues Bleuesの催しの一つとする。</li> </ul>
計画	1時間のセッションを10回行う。 +1回、学校もしくはLa Dynamoにおいて準備。 +1回、ミュージシャンのライブ（のリハーサル）に招待する。
備考	コンサートに参加する場合は割引 教諭との間で、最初と最後に会議を行う。各セッションにも教諭の参加を望む。 学校生活や授業の中で、児童たちの活動をサポートすること。

このプログラムにおいて目を引くのは、西アフリカ音楽を十分に味わってもらおうという主催者側の工夫である。プログラムには、さまざまな種類の太鼓が用意されている。音の異なる太鼓を、子ども達が思い思いに叩き、次第にセッションのようになっていく様子が目に浮かぶ。また、演奏するだけではなく、その歴史や太鼓の役割などについても理解を促すよう準備されている。部族の楽器であった太鼓がヨーロッパに持ち込まれるようになる過程には、必ずしも明るくない歴史が折り重なっている。そうした背景についても子ども達は一部知ることになるのだろう。さらに、最終日には教師や家族を招待してセッションを行う。実際のライブハウスで行う合奏となれば、子ども達の取り組みにも熱が入るに違いない。

教師に対しては、最低でも2回は会議の機会を設けて、コミュニケーションを取ろうという姿勢が見える。直接的に指導をするのはミュージシャンであるが、教師も現場に足を運ぶことで、彼らの様子を伺うことができる。その中で、ミュージシャンとも色々と言葉を交わすに違いない。ここに、アルネット氏が強調する、運営側の協働の姿勢が表れている。なおこうした特徴は、この西アフリ

カ音楽のプログラムに限ったものではなく、すべての活動に通底している。市の提供する放課後活動は、内容こそ多様であるが、アーティスト、教師、市ができるだけコミュニケーションをとるという前提のもと進められているのである。

アルネット氏が目指しているのはこのことである。つまり、この活動は、単なる学習ではなく、音楽の活動でもなく、また単なる公的サービスの受給でもない。そうではなく、このプロジェクトは、学びの活動であり、また音楽に触れる文化活動でもあり、公的サービスでもあるという、この3つが重なる活動である。そこに、「自分が何をやっているのか理解する」ということの意味が浮かび上がってくる。子ども達はプログラムに打ち込む中で、立場の違う大人たちが連携している場面を見、普段の学習とはまったく違う環境にあると身をもって知る。なぜ西アフリカの太鼓を叩いているのか、なぜフィルハーモニーオーケストラの舞台に立っているのか、なぜセヌ＝サン＝ドニの考古学を学んでいるのか、こうした疑問について子ども達が目を向けた時、そこには明確に答えてくれる大人たちがいる。それは、文化を通して社会をまとめていくという一貫したビジョンを子ども達が知る機会になるに違いない。

### (3) アーティストとの協働によってもたらされる変化

ところで、パンタンが抱える問題の主眼が、移民の多い街における学力保障、教育格差の是正といったことである以上、なぜこのプロジェクトが文化を主軸にしているのか？ということが問われてしかるべきである。学校のための課外活動は、直接的に学校での学習をサポートしたり、補習したりするためのものではない。そういった活動こそ必要なのではないか？

そのような問いについて、アルネット氏は次のように明確に回答している。学校のための課外活動は、ただ文化を学ぶという目的にとどまらず、子ども達の学習意欲を高め、学ぶことそれ自体への姿勢を変化させることを広く見据えている。これが、プロジェクトのねらいである。

このような経験（学校のための課外活動による経験）は子ども達や、教師の学校生活を助けることになります。というのは、学校でうまくいっておらず、顧みられていない子が、しばしば、まったく異なる姿を見せるからです。このプロジェクトによって、別の形の教育が生まれ、そのような生徒が開花するのだと、我々は信じています。さらに、教師も子ども達の違った姿を見て、それによって、違ったふうに働きかけることができるのです。文化やアートは、それをする事自体が目的です。でも、学校や普段の生活—親もまた、子どものちょっと違う姿を見ることができ—の手助けをすること、その別の目的へのツールともなるのです。

### (4) アソシアションとの協働

学校のための課外活動を支えているのは、どのような人たちなのだろうか。プロジェクトに関わるアーティストや専門家の多くは、パンタンで活動するアソシアションという団体に所属している。

アソシアション（association）とは、「結社」、「非営利団体」を意味する言葉であり、2人以上の

人間が、営利を目的とせずさまざまな活動を行う組織を指す。行政窓口に届け出をすることで、基本的には誰でもアソシアシオンを設立することができ、認定を受けたアソシアシオンは法人格を得ることができる。

市民との連帯を求めるフランス政府は、市民がさまざまな形で行政と協働して社会活動に参加することを推進している。そのため、アソシアシオンの活動の支援も行っており、市民が行政と協働して教育、文化、福祉といった分野に積極的に参加している。特に2003年以降、パンタン市役所は、アソシアシオンを支えるボランティア政策を推進している。そこでは、市のための有意義な活動を支援するためだけでなく、実験的で革新的な取り組みを奨励することも目指されており、アクションの中心は、あくまでも、市のために参画するパンタン市民であるとされる。約300のアソシアシオンがパンタンで活動しており、市は2014年には187万ユーロの補助金をそれらに提供している。その他にも、セミナーや会議のための場所を提供したり、アソシアシオンの活動を市民に紹介するためのフェアの展開等を行っている。

学校のための課外活動に参加しているアソシアシオンは、このプロジェクトのために組織されたものではなく、もともと自分たちの目的のために組織されていたものであった。それが、国民教育省と市の主導のもと教育現場と結びつき、新たな役割を担っている。

アソシアシオンの活動にはお金が必要です。よって、市が助成します。我々是我々のプロジェクト、プロジェクトに参加する子ども達、そしてその家族とアソシアシオンをつなぐための契約をします。このことによってプロジェクトが一貫性を持ちます。私は、その契約によって、異なる部署や、多様なアソシアシオンと一緒に働くことができます。そして、おもしろいと感じる全ての組織と一緒に活動することができます。例えば、ラ・ヴィレットやフィルハーモニー・ド・パリなどです。我々（市役所）は文化部門を持っていますが、私たちはクローズドな組織をもつアソシアシオンとも一緒に活動することができます、課外活動のためにパートナーシップを築くことができます。（中略）我々の狙いは、我々のパートナーとの協働であり、我々の間には、人々が一緒になって何かをやろうとする時、文化がいかにしてそれを助けるのかということになります。基本的に、パンタンの状況はきわめてユニークです。それは、文化によって何がもたらされるのかという点についての政治的な信念と結びついています。

プログラム一覧からも分かるように、アーティストは、決して無理な負荷を背負い込むことなく、基本的に自らのフィールドに子ども達を招き入れる形でプログラムを実施している。アソシアシオンによるプロジェクトへの参加の仕方は、活動する機会と場を与えられ、その枠組みの中に自らの居場所を求めるといったタイプのものではない。自分のできることをもとに、主体的に枠組みを構成していくようなものである。

市、教育現場、アーティストや専門家が、文化を媒介とした教育という共通の目的に向かっていくが、それは、このプログラムのために新たに打ち立てられたというよりは、それぞれの関心に沿い、さらにそれを引き伸ばすような形で展開されている。子ども達がプログラムに参加することで、

従来のアソシエーションの活動に新たな展開が生まれ、大人達もそこから何かを学ぶだろう。アルネット氏の言う、「人々が一緒になって何かをやるうとする時、文化がいかにしてそれを助けるのか」という問いは、決して子ども達だけに焦点を当てたものではない。プロジェクトに関わる大人達をも焦点に入れているのである。このように、市の先導という強固な枠組みのもとでの自由度の高い活動によって、それぞれの現場がゆるやかに結びつき、それぞれに何かしらの変化がもたらされていく。このような協働の形が、本プログラムも強みであると考えられる。

## 5. おわりに

本稿では、文化を媒介とし、市役所、教育現場、アーティストや専門家がつながり、子ども達を支える独自のプロジェクトを展開するパンタンの事例を紹介することで、教育格差やさまざまな困難な背景の中で生きる子どもへの多様な教育の可能性についてみてきた。

日本においても、冒頭で述べたように、それぞれの子どもの家庭的な背景によって、学びの不均衡が生み出されている状況はフランスと同様である。その中で、私たちの関心は、カリキュラムの見直しや、塾・家庭教師などの学校外学習といった、教科教育の補充・拡充という点から子どもの学びを再考しようとするものになりがちである。

あるいは、教科教育以外の軸として、部活動やボランティア体験といった課外の教育周辺活動についての議論もあるが、いずれも、達成度や勝ち負けといった成果主義に還元されがちであることは否めない。

他方、そのような成果主義以外のアプローチの必要性が着実に浸透し始め、それに呼応した取り組みも広がりつつある。それは、例えば従来の学校教育の枠からこぼれ落ちてしまう子ども達への支援としてのフリースクールの拡充、あるいは学校教育の枠を超えたアート教育などの試み(佐藤・今井, 2003)などである。このようなアプローチは、子ども自身の実感に即した変化を大切にしているからこそ生み出されていくものと思われる。

パンタンの取り組みによって目指されていたものも、文化という仕掛けを生かした、子ども自身の視点を大切にしたいアプローチである。アルネット氏がプロジェクトの目的としてあげた「見て、練習して、理解する」という3点は、いずれも単純な評価の軸でははかることのできない子ども自身の変化に根ざしている。

さらに、パンタンの取り組みで特筆すべきは、このようなプロジェクトが国民教育省と市の先導によって、強力に推進されているという点である。これはアルネット氏のインタビューの中でも繰り返し語られていた。日本においては、学校の外の課外活動はどうしても個々の家庭や教師の努力やボランティア精神によって担われている部分が多い。よって、こういった学外の活動に関われば関わるほど、教育現場が疲弊していくという悪循環にもつながりかねない。しかし、パンタンでは、プロジェクトが市のバックアップを持ち、アルネット氏のように、プロジェクトのための専門職員

が配置されている。市役所と教師が協働しながら子どもをサポートし、そこにアーティストや専門家のプロの技が加わるという形で、プロジェクトは力強い循環構造を持つ。

そのような強固な枠組みの中でこそ自由な活動が生まれ、子ども達は自分たちの活動を愛し、自分の生まれ育った地域の大人によってサポートされていると感じることができるだろうし、それは、自分のルーツを愛することにもつながるのではないかと考えられる。このような活動は、国の枠を超えて多様な教育の可能性を示唆するものであると考えられる。

## 注

- 1) 筆者はこれまで児童養護施設の子供達への支援について検討してきた(高橋, 2012)。児童養護施設出身の子供達の抱える教育格差、特に大学等への進学率の低さ(全高卒者の進学率のおよそ4分の1)は、日本の子供達が抱える教育的不均衡の象徴的な例であると言えよう。
- 2) 本書は、「パリ20区、僕たちのクラス(ローラン・カンテ監督, 2008)」として映画化もされている。
- 3) 「ちいさな哲学者たち」も、「教室へ」も、舞台となっている地域はZEP(教育優先地区)に指定されている。これは、特に手厚い教育を必要とするような低学力や不登校の問題を抱える地域を指し、その多くは移民の多い、貧困地域に属する。
- 4) Ville de Pantin (<http://www.ville-pantin.fr/index.html>)
- 5) 「幼」は幼稚園(年少・年中・年長)、「小」は小学校(1年~5年)を示す。なお小学校は5年制である。「特」は特別支援学校の児童、「語」は、フランス語を母国語としない児童のための特別クラスを示す。
- 6) セーヌ・サン・ドニ県立コンセルバトワール音楽学部であり、パンタンにある。Le Pavillon, département des Arts plastiques du CRD (Conservatoire à Rayonnement Départemental)
- 7) パリ19区にある文化施設であり、パンタンからも近い。Le CENTQUATRE, établissement artistique de la Ville de Paris。
- 8) セーヌ・サン・ドニ県立コンセルバトワール演劇学部を指す。Département Théâtre du CRD。
- 9) パリ19区にある大型公園・アート施設であり、パンタンに隣接している。Pôle Spectacle vivant, en partenariat avec le Parc de la Villette。
- 10) 人形劇を行う芸術団体を指す。La Nef - Manufacture d'Utopies。
- 11) 民間のライブハウスを指す。Dynamo de Banlieues Bleues。
- 12) 民間のライブハウスを指す。La Menuiserie。
- 13) パリ19区ラ・ヴィレット公園内にあるパリ管弦楽団の拠点。Cité de la musique - Philharmonie de Paris。なお、本プログラムはパリの研究施設アラブ世界研究所(l'Institut du monde arabe)とも連携している。
- 14) 民間の音楽・アート施設である。Association Lutherie Urbaine。
- 15) 民間の楽団であり、主にバロック音楽を専門として活動している。Pulcinella - Ophélie Gaillard。
- 16) パンタン市役所内の研究課である。Pôle Mémoire et Patrimoine。
- 17) 民間の科学研究・調査団体である。Association Les Petits Débrouillards Île-de-France。

- 18) 民間の科学研究・調査団体である。CORIF - Centre ornithologique Ile-de-France。
- 19) そのため、パンタンには安く借りられる市営住宅が多く建設されている。

#### 参考文献

- ・フランソワ・ベゴドー. (2008), 教室へ (秋山研吉, 訳), 早川書房.
- ・牧瀬浩一. (2007), 多文化が混在するパリ郊外に根づいた国立ダンスセンター, 国際交流がつなぐ彼方と此方「をちこち」, No.20, 34-37.
- ・佐藤学・今井康雄. (2003). 子どもたちの想像力を育む——アート教育の思想と実践, 東京大学出版会.
- ・高橋菜穂子. (2012). 児童養護施設における自立支援のとりくみ——年長児童2名と職員の関係性の変容, 京都国際社会福祉センター紀要「発達・療育研究」, 28, 19-32.

(たかはしなほこ：講師)

